2 RVP100
465 3 RVP100
堀江敏幸『郊外へ』の説得力
makeanovel

堀江敏幸という作家を一応知ってはいるが、長らく読んだことのない作家だった。なんとなく地味で堅苦しい小説を書く人だろうと勝手なイメージで敬遠していた。

しかし、あるときほんの気まぐれに本屋で堀江氏の『郊外へ』を手にとってみれば、パリやらブルターニュ街やらマルセイユといった異国情緒溢れる単語がひしめいていた。
もちろん全部が全部ではなかったが、多くの読書は私のミーハーな根性を少しでもくすぐる要素に惹かれて始まることが圧倒的に多かった。だから堀江氏の書物に己の少女じみた西洋趣味をくすぐる単語が並んでいることを知らなかったがために、今まで読んでこなかったことが少々悔しかった。
その場で『郊外へ』を買い求め、すぐに読みはじめた。実際には、いかにもミーハーなエッセイではなかった。無論そんな単純なうわべの華やかさだけを綴った本ではないと予想もしていたし、たいていの小説好きは、華やかさの陰に隠れた、暗くて儚くてねじ曲がった視線で書かれているだろう世界を期待して読むものだ。

それにしても。
わたしの唯一知っているパリについて、こんな場所で再会するとは思っていなかったし、誰かがこのパリに焦点をあてて書いている可能性について考えてみたこともなかった。
「知っている」などと少々見栄を張って書いたけれど、わたしが「知っている」というのは、そういう場所があったのか、という圧倒的な一度きりの体験による印象のみである。
初めてのパリは、初めての海外旅行でもあった。一週間でパリとロンドンを駆け足でまわるツアーだ。コンコルド広場に面した大きなホテルに泊まって、エッフェル塔や凱旋門など定番の観光地だけを添乗員について見て回った。実はこれといった思い出もなく、とにかく海外旅行をしたという事実に満足した。
二度目のパリは個人旅行だった。30歳を過ぎて無職になっていたわたしは、日本を発ちローマに入りイタリアを3週間くらいうろついたあと、最後の1週間を過ごすためにパリに入った。チケットはパリアウトというものにしたからだ。
そのひと月の旅は、バックパックをかついた貧乏旅行で、わたしはパリでも他の都市でと同様に、とにかく安いという理由で選んだ、相部屋のドミトリーを予約していた。
ドミトリーの最寄りのメトロ駅に着き、地上に出てみると、そこはいかにも、なパリではなかった。

街並みは雑然としていて、道をゆく人は、白人よりも有色人種が多い。
そして、パリの中心部にだけいるとそんなものが存在するとはにわかには信じがたい、無機質なコンクリートでできた集合住宅の群。住所は19区で、「〇〇区」に入っているので、東京で言えば23区内というイメージでいたのかもしれない。しかしパリのこの19区の辺りは移民を中心とした人間の棲む、都会にも田舎にも属さない、中途半端な場所だった。秩序や目的、そしていわゆるヨーロッパ的な美しさの感じられない茫漠とした空間が延々と続いている・
その風景を見て、ガッカリしたということはなかった。
なんだかむしろ安心した。
パリに到着するまでは、お伽話に出てくるようなアルベロベッロ、魔女が棲んでるみたいなマテーラ、永遠の都ローマといったような、いかにもヨーロッパ的な街を旅してきた。ずっと夢のなかを歩いているような感覚。人の棲む場所というよりも、舞台の書き割りの中を演じる役を持たず、見学しながら歩いているような感じ。
しかし、このパリの19区は、人間が棲んでいる感じがした。
人々は庶民的なスーパーで、なるべく安いものを買い、粗末なテーブルと椅子で日常的な食事をしている。
テラス席で昼間からシャンパンを傾けて生のオイスターに舌鼓を打つ･･･と言う人種はみかけない。
その19区から地下鉄に乗って出かけ、いかにも華やかなパリの観光もした。
でも、結局その旅から戻って思い出すのは華やかなシャンゼリゼ通りではなくて、ドミトリーのそばの、庶民的なパン屋や薄汚れたベトナム料理屋のことばかりだった。
でも、そんな場所に「魅力を感じるから」、その記憶ばかりが蘇るのだとは思い至らなかった。
パリには見るべき物がたくさんあったし、記憶に残るなら、あの壮麗なパッサージュの中の古い芸術写真を扱う店先だったりするべきなのだった。
どうも釈然としないパリでの一週間を、あっという間に意味づけしてくれたのがこの堀江敏幸の『郊外へ』という書物だった訳だ。
要するに、「郊外には魅力がある」。
それで腑に落ちた。なーんだ。魅力がある。だからわたしは19区のことが忘れられないのか。と。
「郊外には魅力があるのだ」と一言だけ誰かに言われても決して納得しないだろう。重層的な物語の世界を通した説得力、というものの、手品みたいに鮮やかな力を思い知った。